

Title	高橋誠一郎先生追憶
Sub Title	Professor Seiichiro Takahashi (9, Mai 1884-9, February 1982) Ein Nachruf
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1983
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.特別号 (1983. 2) ,p.917(1)- 921(5)
JaLC DOI	10.14991/001.19830201-0001
Abstract	
Notes	高橋誠一郎名誉教授追悼特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19830201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高橋誠一郎先生追憶

高村象平

三田山上の木造二階建の中央を占める大教室——たしか32番といった——に、定刻（午前10時）
瀟洒な和服に袴、厚いレンズの眼鏡をかけた長身白哲の教授がそそくさと教壇にのぼられる。この
教室に集まる A・B 2 組の 200 名近くの塾生は、それまでの私語をやめて、一斉に教授の動きに注
目する。「あの先生が高橋先生か」との囁き。かねて写真で見知っていても、間近かに接するのは
今日が初めてである。雪駄をぬいで教壇上の椅子に正座された教授は、やおら懐中から薄い紙片の
束をとりだされる。それが今日の講義に必要な部分だけを、いわゆる原書からとった10枚余りのも
のだったことは、あとで判った。

これがこの年の4月に経済学部本科1年になったばかりの私が、高橋誠一郎先生の講義に列した
ときの最初の風景である。大正15年のこと、今なお記憶にあざやかに残っている。

講義科目は「経済原論」。私たちの机の上には教科書——シドニー・チャップマンのアウトライ
ンス・オブ・ザ・ポリティカル・エコノミーと題する英書——とノートが置いてある。この教科書
は本文 460 頁余りのもの。しかし先生の講義でこの英書を繙くことはあまりなかった。その年の
「経済原論」は、同じ1年の C・D 組の担当が小泉信三先生、E・F 組が三辺金蔵先生で、友人
の言によれば、このお両人はかなりチャップマンを繙かれたようであった。この後、「経済学史」、
「経済思想史」の講義を受けた折にも感じたことだったが、先生の「経済原論」も、ときに古代ギ
リシア・ローマの哲学、ときに中世キリスト教思潮、そして近世初期の経済思想の勘所を要所要所
に鑿められた講義であって、いわゆる理論経済学を内容とするものではなかった。2時間続きの講
義が終って緊張がとける。昼食時である。

講義のノートの穴埋めをしておかないとあとでとんだことになると思うようになったのは、夏休
みも終って教室の窓外に聳える銀杏の大樹に秋色が漂いはじめた頃であった。図書館で借り出すの
は、先生の最初の著書「経済学史研究」（大正9年刊）や、そのあと執筆された論文が載っている
「三田学会雑誌」の合本である。授業の際に耳から入ったものと、活字で示されているものとは、
一見相違することが少なくない。加えて書かれている邦字がむずかしく、即座に読み下せぬ箇所も
相当ある。「臆がて」や「抑も」、「設令ひ」等は、送り仮名から推定できても、「這般」、「這個」、
「犢」、「天鷲絨」等は読みあぐんだ。私独りではない。同輩の誰もがこの語彙——例えばジャハン

——を口吟んで互いに苦笑するのだった。

先生がイギリス留学中に罹られた疾患も癒えて、経済原論と経済学史とを担当されるようになったのが大正3年。29歳の春である。爾来引続いてこの両講義を担当されていたのであるから、このとき41歳の先生の講義はお手のものというべく、私たち初学の徒は稍々甲高い澄んだ声音に聞きほれ、椅子に正座したまま後ろ手で黒板にスラスラと人名や書名を書かれるのを名人芸のように見守るのであった。

経済学部本科3年間の私は、先生の講義を聴きノートをとる平凡な一塾生にすぎなかったが、今なお断片的ながら耳に残っていることがある。2年の課程もそろそろ終りに近づいた頃、それは昭和3年初頭であったが、先生は嘗ての師・福田徳三博士と論争された。その経緯については小池基之名誉教授の追悼文「経済学者としての足跡」（「三田評論」、昨年6月号）に詳しいからここでは省略するが、その前年からアリストテレス経済学について交わされた論争は、このときに頂点に達した観があった。講義の間に洩らされる激しいことばに対して、アリストテレスや彼の住んだギリシア社会について殆んど無知に等しい私たちは、ノートをとることもせず、紅潮した先生の面持ちをただ茫然と見守るのであった。論争の間に交わされた、黄河の彼岸と此岸との豚の毛色が違うとか同じであるとかいう点は、その後しばらく教室で私たちの間の話題になった。「三田学会雑誌」（昭和3年3月号）に載せられた先生の論文——それは福田博士の批難に対する応酬である——を、私たちは解らぬながらも読み、その論文の結びの一句「学問の前には師もなく弟子もなし」に、わずかに先生が味わわれている苦悩を推し量るのだった。

昭和4年の春、私は経済学部助手に採用され、それまでの塾生時代とは違った感慨を抱いて三田山上に通った。当時先生は「三田学会雑誌」の編集に当っておられたが、採用後1年も経つと、私たち助手に同誌への寄稿を命示されるのであった。「何月号に書いたのだから、もうそろそろ書いてもよいでしょう。」ことばは至極柔らかであるが、受ける私たちにとっては腹背に針をさされるような感じを受ける。否応なしに受諾せざるをえない。大体年3回が論文執筆のノルマであった。家事にわずらわされることのない独身時代だったからできたのであろうが、助手連中は平均して4カ月に1回は論文執筆のため顔色は悪くなり体調をこわすのであった。しかしこのきついノルマのおかげで、私たちは専門領域こそ違えそれぞれの所属する学会で多少なりとも名前を知られるようになったのであって、後年になって、先生の後輩に対する励ましを感じるのであった。

経済学者としての先生の業績については、先生の愛弟子小池基之君の前掲追悼文の叙述に譲り、ここでは専攻を異にする私が気付いたことを若干述べるにとどめる。

先生は大正8～10年に諸雑誌に寄稿された論文を集めて「協同主義への道」（大正12年刊）を著わされている。これには社会問題、経済問題が色々の角度から採りあげられている。しかしこれに優って、先生の研究の真髄をなすものは、経済学史関係の著作である。それは大正9年刊の「経済学

高橋 誠一郎 先生 追憶

史研究」，それに続いてフィジokrat学派以前を扱った昭和4年の「経済学前史」と，古典学派から限界効用学派に至る間の「経済学史」，この後者を増補された「経済学史(上巻)」(昭和12年)，戦後の「経済学史略」(昭和23年)があり，さらに特筆すべきものとして「重商主義経済学説研究」(昭和7年，昭和15年改訂)，「古版西洋経済書解題」(昭和18年)，「西洋経済古書漫筆」(昭和22年)の一連の研究書がある。

これらについて註記すると，最初の「経済学史研究」は大正3年から9年に亘って「三田学会雑誌」に掲載された研究論文を集めたものであり，先生が講筵に列された福田徳三博士から出版を勧められ，書名の選定，印刷の体裁も博士が指示されたという。内容は一口にいえば，経済学成立前のヨーロッパ経済思想の研究であるが，近世経済思想の黎明たるマーカントィリズムについて述べられたものが大部分を占める。先生は明治44年イギリスに留学された折から，ロンドン大学附属のゴールドスミス・カンパニー経済文献図書館で16～18世紀のイギリス経済文献を渉猟される傍ら，有名な古書店で古版本を探索されたが，これらの古文獻は日本で披見することは不可能であるとして，留学中もまた帰国後も引き続いて蒐集に努めておられた。先生は古版本の研究に当って，翻刻本よりも原版で読む方が出版当時を想見できるし，翻刻本は校訂者の意見や無責任な誤写誤植によって汚損される場合が少なくないことに留意すべきであると説かれていたのである。

この慎重・周到な見解と，丹念に蒐集された原資料とに基づいて，近世初頭の主としてイギリスの経済思想および学説を祖述されたのが，1,000頁余の「重商主義経済学説研究」であった。原資料の多くは当時の実務家の小冊子より成るが，探求力旺盛な先生にして始めて可能となる業績である。従来重商主義研究は主として貿易論と貨幣論に終始する観があったが，先生はそれにとどまらず，広汎な問題を捉えて重商主義経済学説の全貌を明らかにすることに努められた。当時の重商主義政策が凡ゆる領域に亘っていたのであったから，この立場は至当なものである。歴大な本書の中には，従来経済書史の権威とされてきたジョン・ラムジー・マカロックの記述を信頼できないと斥けられた点，例えばトマス・マンの貿易論やウィリアム・ベティの貨幣論の発行年度の誤りの指摘など，傾聴すべき箇所が少なくない。本書において先生がとくに強調された点は，アダム・スミス等の古典派経済学説が重商主義経済学説に根ざすこと，富と貨幣の区別，貨幣過剰の影響，貿易平衡論，国際分業論等が，重商主義者の間から芽生えて発展して行ったことの追求である。それは「思想は飛躍せず」との命題を裏書きするものであった。

先生がその研究に援用された原資料については，昭和7年5月に催された「慶応義塾創立75年記念西洋経済思想史展覧会目録」(「三田学会雑誌」第26巻所載)や，昭和13年6月に同じく義塾図書館で開催された「第17世紀経済文献展覧会目録」から全貌を窺うことができる。当時これらの文献の陳列に，私たちは総動員されたことを思い出す。

この後に蒐集された経済文献については，昭和15年の「経済思想史随筆」，昭和18年の「古版西

洋経済書解題」，昭和22年の「西洋経済古書漫筆」に詳しい。いずれも稀覯書について詳しい書誌学的・学説史的解説を施したものであって，16世紀後半から19世紀半ばに至る間の文献が対象となっている。すべて先生が所蔵される初版本であって，恐らくこれらの著書はそれらに収められた諸文献の発行地ヨーロッパにおいても貴重とされる業績であるといつて過言ではない。

先生の話題は豊富であった。塾生時代に伺った講義のなかで，例えば古代ギリシアのアテネの社会事情について，または近世重商主義期のイギリス政情について，流暢に話されたとき，それぞれの時代を私たちの眼前に浮びあがらせる力をもっておられた。私たちは，奴隷制度をアリストテレス自身から論ぜられているかの感を抱き，ジェラルド・ヅ・マリオンとトマス・マンとの論争を目のあたりに聞く思いであった。これらが単なる論議だけに終始するのであったならば，経済思想について十分な知見のない私たちのなかには倦怠感を抱く者があつたかもしれない。しかし博識の先生は，これら論争の紹介の間に，さまざまな話題を挿まれるので，倦きることはなかった。もっとも伺いたい気持ちに駆られるのであつた。近年になって私が教師の資質向上について尋ねられたとき，平素の教養の積み重ねが相手——例えば教室内の生徒——を引きつける最良の手段であると言明するようになったのも，嘗ての塾生時代の記憶があつたからであろう。

塾内における先生の役職や，戦後の塾外における教育・文化両面における経歴，その業績についてはここに述べない。先生が愛好された浮世絵の蒐集とその研究については，「浮世絵二百五十年」（昭和13年，新修昭和36年）や，「高橋誠一郎コレクション・浮世絵（全7巻，昭和50～52年）」となつて世に送られていることを述べるにとどめる。先生の浮世絵研究は，前記の経済学史とくに重商主義期のそれを説かれる場合と暗合するといつたら，牽強付会と論難されるであろうか。先生は浮世絵蒐集をご自分の道楽であるといわれていたが，経済古文献の蒐集もまた道楽三昧に徹されたがゆえに立派な成果を挙げられたのではなかったか。私自身の体験を述べるのは烏滸がましいが，学部助手として西洋経済史の分野に足を踏み入れたとき，指導教授から「君の研究が進展して道楽三昧になったとき，初めて世に認められるような成果を挙げることができるだろう」との忠告をいただいた。傍から見ては道楽三昧でも，当人は至極真摯に脇目も振らず黙々と研究の歩を進めていることが多いのである。これと併せて，研究発表の技術，ことに文章表現の如何も成果の評価に大きく作用する。高橋先生の経済学前史や重商主義研究は，部外者にはかなり取っ付きにくい面がある。文献に対して厳正な批判を加えられるのであるから，自ずと文章も固くなり，部外者の立入りを阻むようにもなる。しかし専攻分野については峻厳であり濫りに介入を許さぬ先生も，一度び袴をぬいで袖風の前掛をしめて坐られるとガラリと変つてしまう。大蔵のお宅に伺つた私たちと座談に興ぜられるときがその姿であり，それを先生の著書の中に見出すことができるのである。

それは「王城山莊隨筆」（昭和16年），「わがことひとのこと」（昭和30年），「隨筆慶応義塾」（昭和45年），「回想九十年」（昭和48年）等の一連の隨筆から窺われるものであって，輕妙洒脱の筆致は多く

高橋 誠一郎 先生 追憶

の読者をとらえずにはおかない。語る先生が着流し姿ならば、その前にいる私たちもリラックスした態度である。珠玉の麗筆というべき先生の文章を追っていて、思わず苦笑する場面は限りなくある。そして先生の抜群の記憶力に一驚し、博覧強記に賛辞を発する。快い読書の一刻である。

一二を挙げよう。明治21年の秋、先生が僅か4歳の折、生地新潟から一家をあげて横浜へ転住される途次に見物された浅草吾妻座での「国姓爺合戦」の配役や、久松町千歳座での9代目団十郎の舞台についての感想を、まるで昨日の出来事であるかのように話されるのを伺って、私たちは先生の記憶力に驚く。また晩年、交詢社理事長として、毎週の午餐会の後の講演者への謝辞の中に、当意即妙の感想を加えられ、その該博な識見を耳にする喜びを味わうために出席する社員が少なくなかったことは、いまなお語り草となっている。

恩師福沢諭吉先生は終始一貫市井の間であって、わが国民の教化に努められた。少年期に福沢先生の毎早朝の散歩に随行して、並々ならぬ影響を受けられたことが、高橋先生が生涯民間人に徹される行路を規定したとすることは、牽強付会の言であろうか。そして一方では異国の先覚者の足跡を学んで倦むことなく、他方ではこの国の文化芸術を心から愛好された。まことにこの先生の97年の全生涯は、名利にとらわれない豊かなものであった。

(名誉教授)